

遇法の学び

安田理深

親鸞聖人の御製作の『入出二門偈』に依って話を進めたいと思います。これを選んだのは、こちらからの要求があったからでなくて、私もここに来て勉強したい、自分自身の問題を明らかにしてみたいと思ったからであります。

普通に説教ということがあります。説教とは一般に問いに応じてそれに答えることです。然し学問とは単にそれだけのことではなくして、問いを学ぶことである。つまり問題を明らかにすることです。問題を明らかにすれば自然からそれが答えになる。それを学問というのである。しかし学問にもいろいろありまして、自然科学や哲学もあり、また仏教に関する学問もあります。仏教に関する学問を広く仏教学というんですが、仏教を研究する方法が世間的であると、その内容は仏教であっても世間学となります。

仏教学とは仏教についての学問ではなく「仏教する」ということです。哲学に「哲学する」(Philosophieren)という動詞がありますが、その哲の字をとると「学する」となります。その様に、仏教を学する、仏教を対象として学ぶのでなくて、「仏教する」ことです。仏教を外から学ぶこともできませんが、しかし「仏教する」という場合には、学ぶ自分を明らかにするという意味がそこにあります。学ぶ自分が学ぶという中にあるんです。自分の問題として仏教を明らかにし、又仏教によって自分を明らかにする。そこに仏教を「学する」という意味の仏教学があるんです。道元禪師が「仏道をならふ」というのは自己をならふなり。自己をならふというは自己を忘るるなり」といっておられます。

に、仏教によって自己を明らかにし、自己を明らかにすることによって自己を超えるんです。つまり法によって自己を明らかにし、明らかにした自己を通して法を明らかにするんです。

仏教を固定して考えると教理になります。教理は平たく言えば理屈でして、理屈を明らかにするのは意味をなさずでしょう。それを世間というんです。仏教を知ることによって、仏教から外れることになるんです。教理を学ぶことが教理だと考えるが、それは答えを学ぶことになって、人に教えることになる。だからそういう学び方をすると指導者となる。説く人も聞く人も全然聞こうとしないのでして、学問という問いを明らかにしていないのです。だから皆、船頭ばかりになって船は山に登った。船は客を乗せるものですが、客はおらずに皆船頭になっている。これは仏教を教理と考える誤解に基づくものである。

教理を理解することと、信心を得ることとは別です。理屈を覚えると却って信心から遠ざかることになる。信心を教理として覚えると何も知らないよりもっと悪くなります。それでもって自分をだます。墮落が始まって、そこから脱出できなくなるんです。仏教の教理ということになると、そこに於ける自分というものがなくなる。教理は本来自己とは無関係なのです。

仏教に『涅槃経』という經典がありますが、それは釈迦の最後の説法である。『涅槃経』といっても大乘の經典もあれば原始經典もありますが、その中に『遊行経』、つまり遊びに行くという名の經典があります。中国語では「逍遙する」、ドイツ語では *wandern* 「遍歴する」という意味です。それは学生という意味で、印度では沙門というんです。つまり家庭から離れて思想する人です。思想をとり扱うとマイホームを超えねばならぬのであって、昔の坊さんはそうでした。

そういう昔の坊さんのことを学生といいます。それは人生問題を考える学生だった。自己及び世界を問題として

いく、もっといえば自分が生きておることを問題としていく学生だったので。その中の最後の旅行、法を明らかにし、自己を明らかにする旅行です。昔は寺は移動教室なんです。つまり道場である。道場は今の公民館であって、ここで縁によって法を語られた。法を通して自己を明らかにされた。＼私はこう聞いております＼などと言って、自分にない法を語ったのではない。『歎異抄』の第二章にありますね、「詮ずるところ愚身の信心におきてはかくのごとし」と。＼かく自分は学んでいます＼、＼これは私の了解であります＼という風に、自分の了解を離れて仏法を語らない。もし自分の了解を離れて仏法を語るとするならば、それは理屈になってしまうからです。

つまり自己を通して法を語るということであり、話に責任を持つということである。だから自分の説を押しつけるのではない。信ぜんも、捨てんとも「面々の御計らい」である。「御計らい」とは、勝手にしなさい、ということではない。「私はこう聞いております。賛成されるか、されぬかはあなたの自由だ」ということです。信仰だけは人に押し売りすることはできない。信ずるか、信ぜぬかは全く自由です。憲法に信教の自由を保障するとあるが、法律に許されずとも信仰は自由なのである。

法然も親鸞も共に流罪になりましたが、流罪になられたのは頑固だったんじゃないかと思えます。ある所までは妥協するが最後の一点は譲れない、と。「念仏するな」ということだけは譲れない、と。念仏するのは自分の自由としておるのではなく、自然に念仏が出てくるのである。「止めよといっても、止める権利は私にない」と、こういうのでしょう。

『遊行経』には「法に依れ 法を燈とせよ 自らに依れ 自らを燈とせよ」といって、その一つ一つについて「法に依って、他に依ってはならぬ。自らに依って、他に依ってはならぬ。」とあります。法と自ら以外のものに依ってはならぬというのが釈尊の遺言でしょう。遺教ですから純粹な言葉です。

原始経典は大乗経典の如く文学的でないから華やかでなく地味ですが、仏の言行を忠実に伝えている。聖書のマタ

イ伝、マルコ伝、ルカ伝のように、イエス・キリストの言行を記録したのを共観福音書というが、原始經典は共観福音書のようなものです。

「法に依って他に依ってはならぬ」という、その他とは法と自らの外なるものです。外に依るのを迷信という。普通迷信は信仰に迷ったものと考えるが、それは世間的立場のことです。親鸞は「定散の自心に迷う」という。仏教で迷信というのは自分の心に迷うことをいうのである。迷わせるものなくして自ら迷うのである。自分を迷わせる心はいちばん自分だと思っている。そういう考えを邪見というのである。他人が迷わせただけでなく、自分が迷わせただけです。迷いも亦自覚的なのである。他人が迷わせたと責任を他人に転嫁しない。他人が迷わせるようなことを言っても、自分がかつきりしていれば迷わない。迷うのはあくまでも自己の責任である。だから自覚でしよう。

迷うということは、広くいえば誘惑です。我々以外のものは眩惑させるものに満ちておる。文化は我々を迷わせるものです。自然科学や哲学も自分を迷わせるものです。しかしそれは哲学や科学の責任ではない。迷うのは自己の責任であって、自分がかつきりしておれば科学はかえって役立つのです。科学で自分を救おうとする、科学を信仰すると迷うことになるのです。

仏教の学問というのは、自己の問題を明らかにせよ、ということですが、自己を明らかにするには何によったらいのであろうか。そこに光に遇うということがあります。我々は盲である。我々は自分で目をあげようとするが、それが盲の考えです。闇の中で闇を明らかにすることは困難じゃないかね。闇を破って光に遇うのではない。闇を破るに努力はいらぬ。闇を破って光に遇おうとするのは努力です。努力も闇の努力です。光に遇えば闇は破れるのである。

光に遇うということをもっと具体的にいうと、法に遇うということですが、我々は光を見ることはできない。光を見ると目がつぶれる。光とは物をあらわにするものを光というんです。光は見せしめるもの、見る目は自分です。目を

貰うわけにはいかぬ。我々は我々の目をあけてもらうのである。その目だけはこちらにないとかぬ。光はこちらにないんです。光がないと目があっても役に立たない。目が役に立たないと、ものを見ることは出来ない。

ところで、光に会うことは縁です。因ではない。因なる目は自分が持っているということが不思議です。迷っている衆生でも教えられれば領く。いかに迷い、いかに墮落している衆生でも、迷っているものと知らしめることによって目を寛ましめる。人生の不思議とはそういうことをいうのです。領くことのできるのが不思議なんです。迷ったことを知ることが出来る。つまり目があるのは自分を自覚する機能が与えられていることです。

我々の目は肉眼だけじゃない。視野が開けると見えぬものまで見えてくる。我々の目は普通肉眼ですが、天眼もある。それは自然科学の眼です。青い天あまという天は肉眼による天です。天文学の天は法則の体系であって肉眼に見えるものじゃない、天眼によるものです。まだその上に慧眼、法眼、仏眼もあるといわれる。

眼があるのを仏性というんです。一切衆生悉有仏性という。どんな無能な人間でも仏性があるから悉有という。仏性はまた本来与えられているという意味で本有ともいう。本来の能力、本能です。宗教的本能です。我々は光がないために動物的本能だけになっている。

人間には精神的本能があるんです。もし本来的になら教えられても生きるということはない。あるけれども忘れているか、あるいは病気にしている。忘れているものは気がつくことができるし、病気は治すことができる。死んだものはもう生きるということはない。しかし病気にしているものは生命はある。迷う人間でも人から助けてもらわなければならぬことは一つもない。迷う人でも本来皆目は持っている。ただ教えてもらうことが必要なのです。つまり光が要るわけです。目は持っているのです。だからその目を開ける光が必要なのです。

それでは、どこで光に遇うか。御縁は計画通りにいかぬものです。どこで教えられるかということとは決っていない。子供からでも、事件からでも、ひどい目にあったことを縁として目を開くこともある。そうすれば事件が善知識

なのである。

禅宗の和尚が修行に疲れて休んでいるとき、石を拾って投げたら、竹に当ってカチンと音がした。その竹の音で豁然として目を開いた、という話がある。その場合竹が善知識である。しかし始めからこれが善知識だとかなかなか分らないのです。単に偉い人を善知識というのではない。目を開かせる人を善知識というのである。何故かという、教えを受けるのは偉くなるためではない。愚かなものが賢くなる教えは科学です。しかしそこでは自分を明らかにするということはない。しかし本当は、自分が明らかになれば一切が明らかになるのである。

人間の中で一番大事な問題は、自分がはっきりしていないことです。自分を忘れていることが流転の根源です。自己がはっきりしていないと触れるものすべての奴隷になってしまう。科学に触れると科学の奴隷、金を持つと金の奴隷になる。奴隷になるとは自己を失うことです。単に損をすることではない。損をすること以上です。また単に不幸になることでもない。不幸以上なのです。幸、不幸は世間の問題で仏教の問題ではない。仏教には「流転か、あるいは解脱か」しかない。流転は不幸ではなく惨めということです。つまり法を明らかにすることは真理を見ることです。仏様を見るということは結果からいうので、仏を見ることは仏になることです。我々は流転の法を見ればよいのです。流転も流転の法則によって流転が成り立っているのです。——大きな意義でしょう。——実は法がないと流転もできぬ。妄想で流転するなら流転ではない。我々は妄想で迷うのですが、迷うにも迷う法則があるのです。我々は迷っている法が分らないのです。悟る法が分らないのではない。宿業ということ、あれが迷っている世界の法です。我々は法が分らないので宿業を嫌って宿業と戦おうとする。けれども、それは結局宿業の法が分らないからです。

私はこの間火事にあいました。隣から火が出たんです。まあ焼いたのは人が焼いた。こちらは焼かれたんだから道徳的責任はないから自由です。自由だから明るいかという明るくない。焼かれたという意識の奴隷になるのです。

仏教では焼いたのでも焼かれたのでもない。業の因縁によって焼けたんです。焼いたとか、焼かれたというのは人間の考えです。法ではない。焼けたといって恨むことも、恨まれることもない。焼いた人も焼かれた人も業を共通したんです。向うは焼く方の役割を果たした、こちらは焼かれる方の役割を果たしたまでです。恨むものも、恨まれるものもない。〃やあご苦勞さん〃というだけの話です。

これは理屈ではない。法を明らかにしているのです。理屈は人間の考えをいうのですが、理屈では法は見えない。法によって自分を知るのを悟りというのです。焼いたものが悪いので、焼かれたのは悪くないというのは理屈です。悟りではない。理にかなわぬのは悟りではないが、理にかなっても悟りじゃない。人間が自己を明らかにするのは悟りの智慧なんです。その智慧を明らかにするのが学問なのです。

聞思ということを親鸞は注意しておられます。聞法思惟という。『大無量寿経』には「聞其名号」という。親鸞は『涅槃経』によって『大無量寿経』の意義を明らかにされた。聞は実は聞思ということである。聞は耳で聞くことなく、信を顕わしている。聞いて信ずるといふ、順序はそうであるが信ずる心があるから聞こえるのです。信心が開けて領いたこと、それを蔽密には聞いたことである。単に耳が聞くのではない、信ずる心が聞くのである。耳にきくのを聴といい、心がきくのを聞というのである。

聞思というときの思は思惟ということです。普通には信仰は考えぬことであるというけれども、信仰は本当に考えることである。信仰は単に体験だといってごまかすことは出来ない。考えない体験は酒に酔うたと同じであって、一時の感激に過ぎない。全身をあげて考え、又全身をあげて考えざるを得ないのが自分という存在です。自分以外のことなら聞いておこうということですけれど、自分のことはただ聞いておこうというわけにはいけません。数学の問題なら明日に延ばせばよい。しかし自分のことは明日に延ばせない。そういう問題が人間に与えられているのです。人間があつて問題があるのではなく、人間があることと問題があることは同じなのである。もし問題のない自分がある

ならば、それはここに机があるのと同じことです。我々が生きておることと机があることは違うでしょう。問題を持って生きていることは悩みである。悩まぬのは自己を忘れているからである。

だから釈尊でも、親鸞でも出家されたのは何故かという時、世の人々より世の中を大切にされたということ、生きていることを大切にされたからでしょう。もしこれを失ったならば再びこの生を得られぬと、それほど生きておることの意義、存在の意義を重要視されたからである。太く短くなどと言っている世間の人の方が、本当に世間を馬鹿にしているのである。

人身は受け難い。人間だけに聞く機会が与えられたのである。我々は聞く能力を持っているが、聞く機会がなかった。一切衆生、昆虫も動物も聞く能力を持っているが、光に遇う縁は人間だけなのです。人間に生れたということをもって、一切衆生が聞く道を代表するのです。私が聞いた時、一切衆生が同時に聞くのです。釈尊が正覚感ぜられた時、山河大地も共に成道したといわれる。釈尊が仏になった時、全法界が仏になったのです。

法に照らして自己を知るのであるが、その時の自は自覚であり、法は真理である。自己にあって、自己自身の真理を知るのである。これ以外のものには依らぬ、これ以外のものに依ることは迷わされることです。自覚以外は皆外道です。外道とは自分の外の理屈をもって自己とする立場である。自分の心は自分の内にあると思うが実はそうではない。内にあるけれど実は外に出している。自己を自己の外に出しているのは実は心なのである。

真理と自覚の関係は、真理によって自覚を得る。その自覚の智慧によって更に法を輝かせるのである。何か我々には、今日は今日、昨日は昨日、というようなところがあるけれども、しかしそれだからといって、皆ばらばらというわけではないでしょう。一つの問題を明らかにし、それが明らかになることによって、更にその問題がより深められてゆく。問題がより深められてゆく。問題が一步一步明らかになるということは、何も昔と同じことを繰り返すというわけではない。同じことを繰り返しているだけならば、千年たっても同じことである。それでは歩んだことにな

らないでしょう。歩むということは道を歩むということであり、その道は一貫しているのです。信心によって自分が明らかになり、自分が明らかにすることによって一層法が明らかにになるのであって、その関係は恰も無限の円環を描く如く展開してくるのです。展開することのない固定したものは教理である。それは独りごめ、つまり我見です。

法を聞いて自己を明らかにするのを思惟というのです。これ以外に学問はない。学問することと、聴聞することとを別に考えて、聴聞は寺で、学問は学校でと普通考えるけれども、実は聴聞ということが学問なんです。学問でない聴聞は酔うているだけの話でしょう。話を聞いて有難がって酔うている、しばらくすると冷めてしまい、消えてしまいう。それは聴聞が本当の聴聞になっておらぬからです。本当の聴聞は学問である。だから我々は一生学生でないといけないのでしょうか。学生であるのは偉いからではない、凡夫だからです。普通の人は学問があると偉い人だと思いが、我々はそのは思わない。どうせ凡夫だからといってするのは、実は凡夫ではない。凡夫だから求道せずにおれないのである。生きているということはそれ程重いことなのである。法を明らかにし、自らを明らかにすること、と、このことを真宗の言葉で云えば、二種深信ということである。二種深信が信心です。それを他力廻向の信心というのである。念仏によって与えられる智慧とは具体的には二種深信なのである。二種深信を明らかにすること、それが学問の道です。

『浄土論』の作者は天親菩薩ですが、天親菩薩の教学を唯心の教学というのです。心を取り扱うのは『教行信証』では「信巻」以下に於てである。「信巻」以下は自己を明らかにする巻、「教巻」、「行巻」は法を明らかにする巻である。法を明らかにするものを伝承といい、自己を明らかにするのを己証というのです。この両者は無関係なものではない。伝承から己証が生れ、己証によって伝承を明らかにしていくのです。

天親の教学を唯心の教学と云うとき、それは親鸞の唯念仏を信ずる信の立場とはちよつと違うように見えますが、

しかし最後は一つになると思います。天親の教学は自覚を明らかにされたところにその特色がある。親鸞の念仏の教えは、法を自覚的に明らかにしたところにその特色がある。仏を信ずるといっても、信心の外に仏があるのでない。仏を見出す心は実は自己の内に生ずるのであるけれども、それはまた自己を超えた心である。信ずるのは自分が信ずるのだけでも、その信心は自己を救うものなのである。自己の信心が自己を救うのである。如来の救いという言葉は教相の上からいう言葉である。

私は若い時に唯識の教えを学んで、自己を明らかにする道はこれなんだなあと思った。自分が求めていた道がここにあったと、勿論漠然とした感じであったけれども、思うたのです。それに確信を与えたのが曾我先生です。唯識を選ぶには因縁があったわけです。唯識は暗い教学です。陰鬱です。だが深い共鳴があり、明らかにしたいものがある。しかし明らかにしたいものがなかなか分らない。一番感動したその唯識論がなかなか分らない。だから尚一層それを明らかにしたい。理智では分らないが、本能が要求するのです。分らないが故に却って一層求めずにおれない、止むに止まれぬとはそういうことです。そういうものが天親の教学にあると思うのです。

端的に言えば、『教行信証』の全体は天親の教学で成り立っていると云ってもいいと思います。「教巻」の一番最初に「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向有り。一者往相、二者還相なり」とある言葉によっても知ることができるように、『教行信証』は廻向の教学です。その廻向は『浄土論』の第五廻向文から出るので。そこに教学の源がある。信心といっても廻向された信心です。信心というものを本当に明らかにする教相が廻向でしょう。廻向の教学、それによって純粹な信心が明瞭にされるのです。

廻向はまた「行巻」に出ています。第十七願の深い意味、選択廻向の願という意味です。このことはこれまで誰も分らなかつたんでしょう。諸仏が称讃するという十七願にどんな意味があるかと云えば、選択廻向という意味があるということ。もし第十七願がなかつたら念仏といってみたところで、困った時に称える念仏よりなかつたんですよ。

う。そうでない。念仏が歴史的大行なんです。これしかないような一つの道なのです。あらゆる人間がそこにおいて、同一であることができるような道なのです。「行巻」はその広さを明らかにしたものである。そこに廻向ということがある。

問題はそれで済んでおるとも云えるけれども、その廻向を自覚的に明らかにしてくるのが「信巻」なのである。廻向の法、それが念仏なんです。それによって廻向されるのは自分です。廻向を領く心もやはり廻向された心です。廻向された心が廻向に領くのである。廻向させるのは法ですけれど、するのは自分でしよう。それを廻心というのです。如来の廻向が自分の上に徹底して自覚となったのを廻心という。廻心の外に廻向はない。廻向をそういうように自覚的に明らかにしてるところに「信巻」というものがあるのです。

そういうように『浄土論』は『教行信証』の全体に関係しています。『浄土論』を『教行信証』の深い背景をもって「願生偈」の形で述べたのが『入出二門偈』である。ですから『入出二門偈』を拝読することによって、『教行信証』を通して浄土の精神を明らかにし、浄土の精神を明らかにすることによって『大無量寿経』の願心を明らかにしたいと願って『入出二門偈』を選んだわけであります。

（本稿は、昭和四十八年十月、岐阜県慈光会主催の「入出二門偈」の会における第一講の筆録である。文責 編集部）